

# オノマトペと音象徴

## Mimetics and Sound Symbolism

企画者： 平田 佐智子（神戸大学大学院）  
秋田 喜美（JSPS研究員（東京大学））  
話題提供者： 篠原 和子（東京農工大学）  
平田 佐智子（神戸大学大学院）  
佐治 伸郎（慶應義塾大学）  
秋田 喜美（JSPS研究員（東京大学））  
宇野 良子（東京農工大学）  
井上 加寿子（関西国際大学）  
指定討論者： 今井 むつみ（慶應義塾大学）

### Abstract

This workshop aims at identifying the peculiar and non-peculiar aspects of mimetics (or sound-symbolic words) and sound symbolism. To achieve this goal, six speakers from the fields of linguistics and psychology report their latest findings about the issue, which will be further developed and concluded from a general perspective by a discussant.

**Keywords — mimetics (sound-symbolic words), sound symbolism, peculiarity/non-peculiarity, embodiment, multimodality, iconicity, polysemy**

### 1. 趣旨

音象徴（言語音が特定のイメージと有縁的に結び付く現象）およびオノマトペ（音象徴語、擬音語・擬態語）は、元来主に言語学の分野で研究されてきた。しかし両者は、言語機能だけでなく感覚機能や身体機能との関係も深く、近年では発達・認知心理学・脳科学・工学・医学など多様な分野の研究対象となってきた。

本ワークショップでは、言語学・心理学の分野からオノマトペと音象徴の専門家を招き、その普遍性および特殊性・非特殊性に焦点を絞った話題を提供してもらう。これまでの研究で、特定の音象徴（例：/a/=大 vs. /i/=小）の普遍性、オノマトペの形態音韻上の特殊性、意味的・統語的（非）特殊性、習得上の特殊性などが指摘されている。各話題提供者は、こうした特殊性・非特殊性のマップをそれぞれ特定の分野から描き出していく。続く指定討論者およびフロアとの討論に基づき、学際的な視点より、そうした様相が得られる理由にまで迫る場としたい。

### 2. 流れ

本ワークショップでは主に言語学・心理学においてオノマトペまたは音象徴を対象とした研究を行う6名のスピーカーに話題提供をしてもらう。

篠原は異なる言語話者に対する実験を通して音象徴の言語普遍性について、平田は音象徴と認知機能との並行性を通して音象徴の言語普遍性の可能性について述べる。佐治は子どものオノマトペ理解に関する実験よりオノマトペの特殊性について、秋田はコーパス分析、宇野は実験・コーパス分析よりオノマトペの語類上の特殊性と非特殊性について述べる。井上はオノマトペの意味論的分析よりオノマトペの語類上の特殊性について述べる。

最後に指定討論者として今井を交え、提供された6つの話題を総括し、「オノマトペ・音象徴のどこがどのように言語・認知機構に統合されているのか、それはなぜなのか」という問いに取り組む。

「関西オノマトペ友の会」ホームページ  
<http://www2.kobe-u.ac.jp/~07311061/mimeticclub.html>

音象徴の言語間比較：  
「大きさ」のイメージについて  
Cross-linguistic Comparison of Sound  
Symbolism: The Images of Size

篠原 和子  
Kazuko Shinohara

東京農工大学  
Tokyo University of Agriculture and Technology  
k-shino@cc.tuat.ac.jp

### Abstract

We demonstrate that cases of sound symbolism with phonetic groundings are observed cross-linguistically. Our experiment focuses on the images of size. Our judgment study with speakers of English, Japanese, Chinese, and Korean showed cross-linguistic effects of three factors (vowel height, vowel backness, and voicing in consonants) on the images of size. Our results demonstrate that speakers can perceive the size of sub-oral cavities when they judge the size of nonce words.

**Keywords** — sound symbolism, size, vowel height, vowel backness, voicing

## 1. はじめに

本発表では、Sapir [1]や Köhler [2]の先駆的研究以来多くの言語で研究されてきた音象徴現象について、身体的動機づけのある音象徴は言語普遍的側面を持つという予測を裏付けるため、複数の言語で同じ音声素性が同じイメージを引き起こす傾向があることを実験的に確認する。(なお本発表はBLS36での口頭発表に基づく。実験結果の統計処理と音声学的説明は、川原繁人による。)

## 2. 先行研究および課題

これまでの諸研究では音象徴の通言語的共通性が幾つか指摘されている。例えば母音の調音上の開口度との相関により、[a]が[i]よりも「大きい」イメージを喚起することや ([1], [3], [4]他)、前舌母音よりも後舌母音が「大きい」イメージをもつこと [5]、子音の有声性が「大きい」イメージを喚起すること [6]等の報告がある。本発表ではこれら3種の要因(母音の開口度、母音の前後、子音の

有声性)が、複数の言語において「大きさ」のイメージを喚起すること。またこれらには音声学的説明を与えることができることを示す。

## 3. 実験方法

刺激は有声阻害音/b, d, g, z/, 無声阻害音/p, t, k, s/, 母音 /a, i, u, e, o/を用いたVCVC型の2音節の無意味語40語である(有声阻害音群: abab, ibib, ubub, ebeb, obob, adad, idid, udud, eded, odod, agag, igig, ugug, egeg, ogog, azaz, iziz, uzuz, ezez, ozoz, 無声阻害音群: apap, ipip, upup, epep, opop, atat, itit, utut, etet, otot, akak, ikik, ukuk, ekek, okok, asas, isis, usus, eses, osos)。被験者は場面設定を記述した文章を読み、次にローマ字表記された刺激語を見て、各々の刺激語の意味を4段階尺度{1=とてもきれい, 2=どちらかというときれい, 3=どちらかというときれい, 4=とても汚い}で推測した。日本語話者42名、英語話者22名、中国語(北京語)話者20名、韓国語話者19名が参加した。

## 4. 結果

結果は表1に示す通りである(\*は統計的有意性を表す)。

表1 実験結果

	日	英	中	韓
開口度	***	*	n.s.	*
母音の前後	***	***	***	***
有声性	***	***	***	n.s.

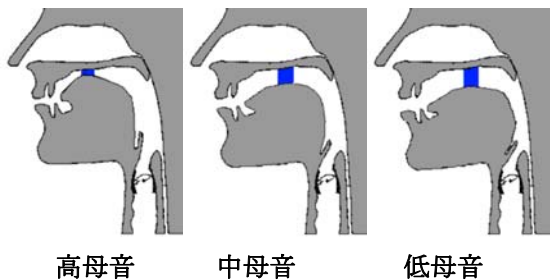
次の3項目が確認された。

- (1) 母音: 低 [a] > 中 [e, o] > 高 [i, u]
- (2) 母音: 後 [u, o] > 前 [i, e]
- (3) 子音: 有声 > 無声

## 5. 音声学的基盤

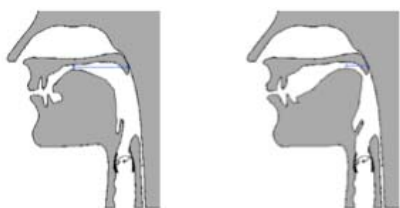
これらの通言語的音象徴反応は、(a) 調音音声学的説明、(b) 音響音声学的説明が可能である。母音の調音的側面では、図1に示すように高母音 [i] < 中母音 [e, o] < 低母音 [a] の順に口腔の開きが大きくなる。また図2では舌の口蓋への接近位置

より口先方向にある副口腔共鳴空間が、後舌母音のほうが大きい。また後母音[u, o]は通常、円唇化するため、副口腔共鳴空間がより大きくなる[7]。



高母音      中母音      低母音

図1 母音の開口度\*



前舌母音      後舌母音

図2 母音の前後\*

(注：図1，2とも <http://www.ic.arizona.edu/~lsp/Phonetics/Vowels/Phonetics> から採った.)

音響学的な面では、周波数の低い音はより大きな共鳴空間を持つことを示しているが[8]、低母音は他より  $F_0$  が低く[9]、後舌母音は  $F_2$  が低い[7]。

子音の調音音声学的側面では、有声障害音を発音する際、話者は口腔を拡張する[10]，[11]。音響学的側面では、 $F_0$  が低い方がより大きな物体であることを示すが[8]。多くの言語で母音は有声子音の隣にあるときのほうが無声子音の隣にあるときよりも低い  $F_0$  をもつ[12]。

これらの音声学的所見は、実験結果が示す通言語的な「大きさ」のイメージ喚起の傾向と合致する。母音の高さ、母音の前後、子音の有声性の3要因による「大きさ」のイメージ喚起には、音声学的基盤が存在すると考えてよからう。

## 参考文献

[1] Sapir, E. (1929) "A study in phonetic symbolism." *Journal of Experimental Psychology*, Vol. 12, pp. 225-239.

[2] Köhler, W. (1929) *Gestalt Psychology*. Liveright.

[3] Paget, R. (1930), *Human Speech: Some Observations, Experiments, and Conclusions as to the Nature, Origin, Purpose, and Possible Improvement of Human Speech*.

[4] 上村幸雄 (1965) "音声の表象性について", *言語生活*, Vol. 12, pp. 66-70.

[5] Berlin, B. (2006) "The first congress of ethnozoological nomenclature", *Journal of Royal Anthropological Institution*, pp. 23-44.

[6] 吉田航・篠原和子 (2009) "音声素性によるイメージ喚起", *JCSS第26回大会ポスター発表*.

[7] Stevens, K., Keyser, S. J., & Kawasaki, H. (1986). Toward a phonetic and phonological theory of redundant features. In J. S. Perkell & D. H. Klatt (Eds.), *Invariance and variability in speech processes*, New Jersey: Lawrence Erlbaum. pp.426-449.

[8] Ohala, J. J. 1994. The frequency codes underlies the sound symbolic use of voice pitch. In L. Hinton, J. Nichols, & J. J. Ohala (Eds.), *Sound symbolism*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.325-347.

[9] Whalen, D & Levitt, A. G. (1995) The universality of intrinsic  $F_0$  of vowels. *Journal of Phonetics* Vol. 23, pp. 349-366.

[10] Ohala, J. (1983) The origin of sound patterns in vocal tract constraints. In *The Production of Speech*, P. MacNeilage (Ed.), 189-216. Springer-Verlag.

[11] Ohala, J. & Riordan, C. J. (1979) "Passive vocal tract enlargement during voiced stops", In *Speech Communication Papers*, J. J. Wolf & D. H. Klatt (Eds.), pp. 89-92.

[12] Kingston, J., & Diehl, R. (1994). "Phonetic knowledge." *Language*, Vol. 70, pp. 419-454.

# 音象徴と感覚間一致 Sound Symbolism and Cross-modal Correspondence

平田 佐智子  
Sachiko Hirata

神戸大学大学院  
Kobe University  
shirata@lit.kobe-u.ac.jp

## Abstract

In this paper, the parallel relationship between sound symbolism and cross-modal correspondence is considered. Garner's speeded classification using voiced/voiceless consonants and brightness as stimuli was conducted to show the cross-modal correspondence between these stimuli. The results showed the correspondent relationship between these stimuli, which suggests that the two phenomena share a common cognitive basis.

**Keywords** — sound (phonetic) symbolism, cross-modal correspondence, voiced/voiceless consonants

## 1. 目的

本論の目的は、音象徴をもたらす身体基盤は感覚間一致である可能性を示すことである。感覚間一致(cross-modal correspondence)とは、例えば高い音と明るい色、低い音と暗い色が類似すると感じるような、感覚モダリティを超えた類似性・一致性を指す。本実験では目的達成のため、すでに音象徴的關係が示されている刺激対(例：有声/無声と明度)が、感覚間相互作用を測定する Garner's speeded classification task[1]において同様の一致傾向をみせるかどうかを検討する。音象徴的關係と感覚間一致關係が同一パラダイムにおいて同様に振る舞う点を示すことにより、両者が同一の認知基盤を有している可能性を提示する(本内容は認知心理学会における筆者の発表[2]に基づく)。

## 2. 方法

聴覚刺激として録音された女性の音声(有声子音：「ば・だ・ざ・が」、無声子音：「ぱ・た・さ・か」)、視覚刺激としては白色と黒色の正方形(5×5cm)を使用した。背景色は常に灰色とした。参加者の課題は指定された刺激(色・音声の有声/無声性)に対して弁別を行い、なるべく速く指

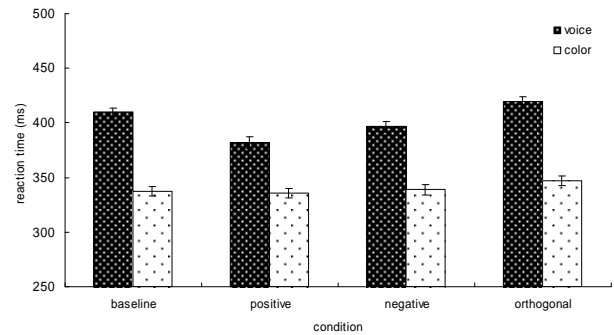


図1 各条件における反応時間

定されたキーを押すことであった。実験条件の構成は Garner's speeded classification task[1]に準じた。

## 3. 結果及び考察

課題(2)×条件(4)の分散分析を行った結果、課題の主効果( $F(1/31) = 128.19, p < .001$ )、条件の主効果( $F(3/93) = 9.17, p < .001$ )、課題×条件の相互作用( $F(3/93) = 3.20, p < .05$ )が有意であった。下位検定(Ryan法)の結果、音声弁別課題の単次元変化条件よりもPCブロックにおいて反応時間が短かった。これは、一致する組み合わせで呈示されていることによる反応時間の促進を示している。

【一致効果：音声弁別課題】条件(3)×一致性(2)の分散分析を行った結果、一致性の主効果( $F(1/31) = 15.80, p < .001$ )が有意であった。下位検定(Ryan法)の結果、関連変化条件及び直交変化条件においてイメージが一致した場合の方が不一致の場合よりも反応時間が短いという一致効果が見られた。

【一致効果：色弁別課題】音声弁別課題と同様の分析を行った結果、一致効果は見られなかった。一致による促進及び音声弁別課題における一致効果から、音象徴的關係が示されている有声/無声子音と明度の間に感覚間一致的關係が見られることがわかった。

## 参考文献

- [1]Martino, G., & Marks, L.E. (1999). "Perceptual and linguistic interactions in speeded classification: tests of the semantic coding hypothesis." Perception, Vol.28(7), pp. 903-923
- [2]平田佐智子・喜多伸一・浮田潤(2009). 有声・無声子音のもつイメージは文字と音声で異なるか? 認知心理学会第7回大会論文集.

# 言語獲得における語彙的類像性の効果の 実験的検討

## The lexical iconicity effect in language development

佐治 伸郎  
Noburo Saji

慶應義塾大学 先端研究センター  
Advanced Research Centers, Keio University  
nons@sfc.keio.ac.jp

### Abstract

The aim of this study is to investigate how children understand the sound-symbolic words which are diverse in its degree of lexical iconicity. Our results suggest that children can understand high-iconic words in a very early stage of language development whereas they gradually “learn” the meaning of low-iconic words with age.

**Keywords — mimetics, lexical iconicity, language development**

### 1. 背景と問題

近年オノマトペの持つ音象徴に関する理解が子どもの言語獲得の大きな手がかりとなりえることが報告されている[1]。これらの研究は子どもが言語的知識を構築していく際、自身が知覚した音と語の意味とを柔軟に結びつけながら学習を進めていく可能性を示唆する。一方で従来の研究では明らかに高い音象徴性を持った特定の語とそうでない語の比較はされてきたものの、その中に存在する類像性(記号の形式が参照対象を有縁的に表す性質)の程度の差が子どもの語の理解にどのように影響を与えるのかについては十分に議論がされていない。そこで本研究では、語彙的類像性の程度に差があるとされる日本語の擬音語、擬態語、擬情語を事例に[2]、子どもがこれらの語の持つ音象徴性をどのように理解しているのかを検証した。

### 2. 実験

実験ではまず刺激の選定のために、日本語における擬音、擬態、擬情語を13ずつ選び、それぞれの事態を表す動画を作成した。次にこれらの動画に対する評定実験の結果から、言語音とそれぞれの動画との合致度が高い順に擬音、擬態、擬情語それぞれ6ずつ動画を選び、実験で用いる基準

刺激とした。更にこの18の基準刺激と最も“合っていない”音に対応した動画と基準刺激とを合わせ、刺激ペアを構成した。実際の実験には3歳(26名)及び5歳(26名)が参加した。子どもにはこの18の動画のペアを見てもらい、基準刺激に合った音をもとに作成した新奇動詞(例:「ざぶざぶ」→「ざびっている」等)により指示される動画はどちらかを強制選択してもらった。

### 3. 結果と考察”

まず音、態、情それぞれの正答率を比較したところ、3歳、5歳ともに有意に50%以上の正答率を見せた(音、態、情に対しそれぞれ3歳:.71, .67, .60; 5歳:.78, .74, .86)。このことは、実験に用いた新奇動詞の意味を、子どもはその語彙に含まれる音象徴性を手がかりとして推測できたことを示す。さらに、月齢と正答率との相関を見ると、擬音的刺激に関しては無相関に近い値であったのに対し擬態、擬情的刺激には正の相関が見られた(それぞれ $r=.11, .50, .41$ )。これは擬音的音象徴に関しては初期からその意味について既に理解されているが、擬態、擬情的音象徴に関しては発達過程で音象徴性の理解が“進む”ことを示している。本研究の結果は、言語獲得における音象徴の役割について、単純に音象徴性のある/なしという議論でなく、音と外界の事象との繋がりがどれだけ直接的であるのかどうかという観点から捉える必要があることを示す。さらに類像性の低い音象徴語が子どもに“学習される”過程は今後新たに検討されるべき研究課題となりうるだろう。

### 参考文献

- [1]Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., Okada, H. (2008). Sound symbolism facilitates early verb learning. *Cognition* 109, 1:54-65.
- [2]Akita, K., Gradient integration of sound symbolism in language: Toward a crosslinguistic generalization. (2008). In Shoich Iwasaki, ed., *Japanese/Korean Linguistics 17*. Stanford, CA: CSLI Publications.

# 共起特性から見る日本語オノマトペの フレーム意味論 A Collocational Approach to the Frame Semantics of Japanese Mimetics

秋田 喜美  
Kimi Akita

日本学術振興会／東京大学／カリフォルニア大学  
バークレー校  
JSPS / the University of Tokyo / UC Berkeley  
akitambo@gmail.com

## Abstract

This paper discusses some fundamental semantic properties of sound-symbolic words based on a collocational analysis of Japanese mimetic and nonmimetic adverbs. Our results suggest the high referential specificity and holisticity of mimetics and their gradience. The present empirical approach to mimetic (frame) semantics substantiates the intuitive characterizations of mimetics in the literature.

**Keywords** — **mimetics, Frame Semantics, collocation, Japanese**

## 1. はじめに

本論は、日本語コーパスにおけるオノマトペ副詞の生起特性の分析から、その意味の中核に迫る。指摘するのは、オノマトペの指示的具体性・全体性とその段階性である。

## 2. 問題と枠組

従来、通言語的にオノマトペは音韻形態的特殊性に基づいて特徴付けられるのが主で、その意味的定義は、Doke (1935)による“vivid”という形容に代表されるように、極めて直感的なものであった。一世紀弱もの間未解決となっているこの根本的課題に対し、本論は実証的アプローチを取る。

理論的枠組としてはフレーム意味論 (Fillmore 1982 等) を用いる。「フレーム」とは、状況基盤のスキーマ的意味表象である。例えば、*retail, sale, sell* 等の語は共に *Commerce\_sell* フレームを喚起するとされ (<http://framenet.icsi.berkeley.edu/> 参照)、品詞境界を越えた意味的關係まで捉えられる。

## 3. 方法

本研究は小説コーパス『青空文庫』を用いた。

小説では創造的な共起關係が生まれ易いため、その中でも維持される共起關係は特に有意義だと想定できる。共起強度の指標としては  $t$  スコアを用い、 $t \geq 2$  の例を「強いコロケーション」とした。観察対象は、Kakehi et al. (1996) のオノマトペ辞典における全 2 拍重複形 518 語 (例: ごろごろ) と、仁田(2002)の副詞一覧のうちオノマトペではない全一般様態副詞 164 語 (例: 軽やかに)、およびそれらの共起動詞・名詞である。各副詞の前 5 語→後 3 語を検索対象とし、得られた強い共起語の喚起フレームを 2 名で特定した (一致率 99.8%)。

## 4. 結果と考察

まず、表 1 のように、オノマトペ副詞は一般副詞よりも強い共起動詞・名詞が少なく、指示的特定性が窺える。この傾向は類像性が高いものほど顕著であるという点で段階的である。また、動詞ほどではないまでも名詞とも強く共起しうることは、オノマトペの事象描写の全体性を示唆する。

表 1 強い共起語の平均数

	動詞	名詞
擬音語副詞	0.32	0.16
擬態語副詞	0.77	0.31
擬情語副詞	0.97	0.36
一般副詞	3.51	2.60

次に、2 つ以上の共起動詞または名詞を持つ副詞について、それらの喚起フレームを比べた結果、表 2 の通り、オノマトペ副詞の共起語の方が遥かに頻繁にフレーム間關係を实らせた ( $\chi^2(1) = 66.7, p < .001$ )。例えば、「じろじろ」と共起する動詞「見る」と名詞「目」はそれぞれ *Perception\_active* と *Observable\_bodyparts* というフレームを喚起するが、両者は *Using* という一般的フレーム間關係で結び付けられる。やはりオノマトペは一般にフレームの特定性が高く、これは“vivid”な印象の根源と解釈できよう。

表 2 共起語のフレーム間關係

	あり	なし
オノマトペ副詞	118 (81.4%)	27 (18.6%)
一般副詞	95 (38.8%)	150 (61.2%)

## 参考文献

<http://sites.google.com/site/akitambo/> の目録を参照。

# ウェブコーパスや人工触覚生成器を用いた オノマトペの分析 Onomatopoeia and embodiment

宇野 良子  
Ryoko Uno

東京農工大学  
Tokyo University of Agriculture and Technology  
ryokouno@cc.tuat.ac.jp

## Abstract

Using an artificial tactile system and Web corpus, we aim to bridge the gap between onomatopoeia and embodiment.

**Keywords** — Onomatopoeia, Bodily Image, Neologism, Web Corpus, Tactile Display

## 1. はじめに

本稿では、著者が二つのグループと行ってきた学際的なオノマトペの分析から、オノマトペの表す意味の特殊性を身体的イメージあるいは話者の視点の関与という観点から考える。

## 2. ウェブコーパスを用いた新オノマトペと新動詞の比較

まず、東京大学生産技術研究所の鍛冶伸裕氏・喜連川優氏との共同研究[1]を紹介する。オノマトペの表す意味には、他の品詞に比べて特殊性があるのか、という問題を、これまで私たちが行ってきた新造語の分析を応用して、考察した。

データは 1999 年から今日まで蓄積されてきたウェブアーカイブ中の一部で、自然言語処理の手法によってそこから新語を抽出している。

収集した新語のうち、新オノマトペの「モフモフ」とそこから派生した新動詞「モフる」の二語の使われ方を、オノマトペの特殊性を考察するために、分析した。それぞれの語の使用例を以下に一つずつ挙げる。

(1) 肉球の間のモフモフ毛もスキさあ

(2) 実家のはなちゃんに似ている猫をモフっていたら、

「モフモフ」については、空気をたくさん含ん

だ柔らかいものと接触する感覚を表す擬態語であり、次の A, B, C の三つの意味領域で用いられるということが分かった。

A. 犬や猫などのやわらかな毛の感触

B. スクーンなどの水分が少ないやわらかな食感

C. ゲームキャラクター等が緩慢に動く様子。一方、「モフる」という動詞は、自動詞（「ふんわりする」）と他動詞（「ふんわりしたものを触って愛でる」）としての用法があるが、どちらも A の意味領域しか表さないことが分かった。

そして、「モフモフする」は中間的な振る舞いを見せる。以下の表に各語が各意味領域で何パーセント用いられるか、という結果をまとめた。

表 1

	A	B+C
モフモフ	76%	24%
モフモフする	92%	8%
モフる	100%	0%

「モフモフとする」ことは「モフる」とこととイコールのように一見思われるが、このようにデータを見てみると、動詞「モフる」になると表すことのできる意味領域が特殊化している。一方でオノマトペの方はある身体的イメージを意味領域を超えて表すのに用いられる、といえる。今後より多くのペアについて同じような分析をする予定である。

## 3. 触覚ディスプレイを用いたオノマトペの感覚の再現

オノマトペが表す意味の性質は、他の品詞のそれとは異なるのではないかと、という指摘は、Kita [3]などにより行われてきた。特に、Ikegami & Zlatev [4] は、オノマトペは、身体的イメージを表すのに用いられる、と主張する。

オノマトペが身体的イメージと結びつくとして、それを扱う手法を東京大学大学院広域システム科学系の大海悠太氏、池上高志氏との共同研究[5]で構築することを目指した。

具体的には、被験者が触覚のオノマトペから想

起する触覚を再現する装置を作った。それは触覚ディスプレイと三次元位置センサーによるアクティブな触覚のシステムである。リカレント型ニューラルネットワーク（RNN）に手の動きを入力として与え、その RNN の出力を特殊な樹脂を介して指にあてると触覚が立ち上がる。図 1 にこのシステムを示した。

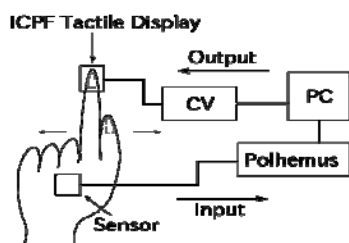


図 1

そして、4 人の被験者に「ウネウネ」と「ザラザラ」という二つのオノマトペの触感を作るように指示し、RNN を進化させた。被験者にとって思い通りの触覚ができたところで RNN が完成したと見なす。

完成した RNN の触感を用いて、各被験者に以下の三つの実験を行なった。

**実験 1.** 自分の作った触感と他の人が作った触感の判別。

**実験 2.** 調整法による、RNN からの出力にノイズを加えた時に、触感が変わるノイズの閾値の測定。

**実験 3.** ウネウネとザラザラを用いた例文の作成。

結果としては、実験 1 からはザラザラはウネウネより自分の触感と他の人のものの判別がしにくいことが分かった。実験 2 からは、ザラザラはノイズを大きく加えてもその触覚が変わらないため、ザラザラは高い頑健性を示しており、ウネウネはそれに比べて頑健性に劣ることが分かった。

つまり、ザラザラと結びついているのは比較的客観的で安定した感覚であるのに対して、ウネウネは私的で不安定な感覚と結びついていると言える。つまり同じオノマトペでもウネウネの方がザラザラに比べて、より身体的イメージと強く結び付いていることが分かった。実験 3 の言語データの分析もこれを支持する形となった。

## 4. まとめ

以上触覚のオノマトペについての新造語の研究と触覚再現の実験を紹介した。これらの研究から、オノマトペが身体的イメージあるいは話者の視点と結びつく傾向にあり、しかも、その結びつきの度合いはオノマトペの中でもいろいろとあり得る、ということが示唆される。現在、2 節で紹介した鍛治氏・喜連川氏との共同研究で、ウェブコーパス内の膨大なオノマトペ間の「意味の距離」を測って表示するしくみをつくっているが、その際に本稿で論じたような身体的イメージとの結びつきの度合いを指標として入れることを目指している。

## 参考文献

- [1]宇野良子・鍛治伸裕・喜連川優（印刷中, 2010）“新動詞の成立にみる意味と形の変化の相関—ファブる」と「モふる」の分析から—”, 日本認知言語学会論文集。
- [2]宇野良子・大海悠太・池上高志（2009）“オノマトペの認知言語学的分析—言語に見られるアクティブ知覚の考察—”, 日本認知科学会第 26 回大会論文集, CD-ROM, o2-2.
- [3]Kita, S. (1997) “Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics”, *Linguistics* Vol. 35, pp. 379-415.
- [4]Ikegami, T. & Zlatev, J. (2008) “From pre-representational cognition to language”, J. Zlatev, T. Ziemke, R. Frank, & R. Dirven (eds.), *Body, Language and Mind*, Vol. 1. Berlin: Mouton de Gruyter. pp. 241-283.



# オノマトペの創造性と意味拡張 Productivity and Semantic Extension of Onomatopoeia

井上 加寿子  
Kazuko Inoue

関西国際大学  
Kansai University of International Studies  
ka-inoue@kuins.ac.jp

## Abstract

The purpose of this paper is to consider the process of semantic extension of onomatopoeia, especially in unconventional use. I analyze examples of onomatopoeic expressions in Japanese literature and poetry and insist that multimodality motivates polysemous onomatopoeia to extend from conventional use to unconventional use synaesthetically, metaphorically or metonymically.

**Keywords — onomatopoeia/mimetics, polysemy, multimodality, synaesthetic metaphor, semantic extension**

## 1. はじめに

一般に、オノマトペは創造性が豊かなことが特徴とされ[1][2][3]、その多くは多義であり、こうした側面を扱う研究が近年さかんに行われている[1][4][5]。本論では、オノマトペの創造性と多義性に着目し、オノマトペ表現が慣習的用法から新奇の用法へと拡張するプロセスについて論じる。そして、オノマトペの新造表現の創発の過程と、人間の認知的基盤である五感（視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚）の感覚間の転用関係を通してみられる比喩性に関し考察を行う。

## 2. オノマトペの多義性

本論では、まず、オノマトペの多義性についてとりあげ、比喩的な用法への意味拡張のプロセスについて、五感との関連から概観する。オノマトペは、複合感覚的 (multimodal) な様相を表す語彙グループであり、そこからある感覚へ焦点化された表現へとメトニミー的に拡張する。この場合、オノマトペは、ある原感覚から拡張した共感覚的比喩表現 (synaesthetic metaphor) ととらえることができる。

## 3. 新奇の用法への拡張

次に、オノマトペの創造性についてとりあげ、慣習的な用法から新奇の用法への拡張例を分析する。そして、オノマトペの意味拡張について、複数の感覚の共起性に動機づけられた擬音語・擬態語間のメトニミー的拡張だけでなく、擬態語から擬音語、擬態語から擬態語といった、認知的多義に基づいた新奇の用法へのメタファー的拡張が見られることを明らかにする。

## 4. まとめ

オノマトペは、複数の感覚領域を未分化な状態で表す語彙グループであり、私たちはそれにより状況全体を認知する。このように、オノマトペは複合感覚的特徴をもつことから、慣習的なオノマトペの多義性は、共起性に基づくメトニミーによってとらえられる。すなわち、複数の感覚領域に関連する用法から、ある感覚領域がプロファイルされ、意味が拡張する。そして、オノマトペの新奇の用法は、慣習的な用法におけるプロトタイプ的意味からの拡張例としてとらえられるものであり、その背景には、メトニミー的拡張とメタファー的拡張が相互に作用している。

## 参考文献

- [1] 筧壽雄 (1993) “一般語彙となったオノマトペ”, 月刊言語, Vol.22, No.6, pp. 38–45.
- [2] 荻阪直行 (1999) 感性のことばを研究する: 擬音語・擬態語に読む心のありか, 東京: 新曜社.
- [3] 田守育啓 (2002) オノマトペ: 擬音・擬態語を楽しむ, 東京: 岩波書店.
- [4] 武藤彩加 (2001) “日本語の「五感を表すオノマトペ」における意味の転用: 「共感覚的比喩」の分析を通して”, 日本認知科学会第18回大会発表論文集, pp. 30–31.
- [5] 大澤 (伊藤) 理英 (2007) “オノマトペの意味拡張の事例に基づく共感覚的比喩表現の方向性における反例と考察”, 日本認知言語学会大会論文集, Vol.7, pp. 365–374.